

蠟山政道先生を追悼して

学長 中川 秀 恭

謹んで蠟山政道先生の御霊に申し上げます。

先生は昭和37年本学に教授として御着任、同40年教授を辞して客員教授となられ、昭和48年にいられました。

その間、社会科学研究所長、つづいて大学院行政学研究科、社会科学研究所顧問をかねられ、深遠な御学識、豊かな御経験、典雅にして温厚な御人格によって多くの英才を育成されました。

先生は行政学は公共の福祉を擁護するものであり、理論に基礎づけられた実践にいたるところにその特色があり、学問体系としては高度に学際的であるべき

だとのお考えをもっておられました。そして、わが国にそのような学問体系をもつ行政学大学院のないことを嘆いておられました。先生が本学の度重なる御願いにこたえて専任教授として御就任になられましたのも、実は先生の御構想になる行政学大学院を設置するためでありました。

先生は御着任になられると、直ちに教授陣の充実をはかり、関係教授を指揮して、綿密な計画を立て、行政学研究科修士課程の設置を申請さ



1963年3月 本学構内にて

れました。かくして、昭和38年4月わが国にはじめて行政学大学院が設置されたのであります。こえて、昭和51年4月にはこの研究科に博士課程が設置され、きわめて特色のある研究・教育が行われて今日にいたっております。

先生は御退職後も、本学に深い御関心と御愛着とを寄せられ、わが国においては他に類を見ない行政学関係のほう大な資料・文献の大部分を本学に御ゆずり下さいました。これによって、本学の行政学研究科が一層充実したことは申すまでもありません。

本学の教授・学生の先生に対するは、時にはきびしい師に対するが如く、時には慈父に対するが如く、そこには学問を中心とする美しい人間と人間の関係がありました。このような先生の学者として、人間としての人間像は、本学の教授・卒業生の心の最も深いところにきざみつけられ、永く消えることがないでありましょう。

本日ここに最後の御別れをするにあたり、本学にたいする先生の御功績をたたえると共に、深甚なる感謝の意を表明し、残された者の悲しみと淋しさをのり越えて、先生のおつくりになられた行政学大学院の充実と発展とにますます力をいたし、先生の御遺志を継承すべく期しておる次第であります。

願わくば先生の御霊の上に御平安が、また御遺族の方々の上に御慰めが豊かにあらんことをお祈りして、弔辞とします。

(昭和55年6月2日の告別式における追悼文を掲載いたしました。)